

児童の実態に応じたAAC(拡大・代替コミュニケーション)の活用 ~子どもからの発信を広げる取り組み~

要約:自ら要求する等の発信があまり見られない子どもから、発信を引き出したり、広げたりするためのAACの活用について、事例研究を通して検証した。その結果、子どもの実態に応じたAACを活用することが、子どもからの発信を引き出したり、広げたりすることに効果的であると分かった。子どもとの関係においては、「分かり合い」「通じ合い」のコミュニケーションが大切であること、また、子どもの実態に応じたAACを選択するためには、心理アセスメントを活用した確かな実態把握をすることや、AACの特徴を知ることが大切である、等の点について理解を深めることができた。

キーワード: コミュニケーション AAC 子どもからの発信 アセスメント PECS

・主題設定の理由

知的障害の養護学校に通う児童・生徒の中には、音声言語がなかったり、文字が理解できなかったりして、自分の気持ちを表現することや、他者の気持ちを理解することが困難な子が多くいる。また、音声言語があり文字が理解できても、自閉症の子のように感情等の表出・受容の仕方が分からず、それらを上手に使えない児童・生徒も多くいる。しかし、これらの子どもたちの一人一人がそれぞれに思いを持ち、言いたいこと・伝えたいことを持っているはずである。

これまで、このような子どもたちとコミュニケーションを図るために、絵カードや写真カード等の視覚的な手だてが使われることがあった。この絵カードや写真カードのような視覚的な手だてを含め、コミュニケーションを取りやすくする(確保する)手だてとして、AAC(拡大・代替コミュニケーション)という概念がある。私自身、これまでAACという概念を意識して使ってきたことはなく、AACという名前程度の知識しか持っていなかった。

さて、これまでの自分の取り組みを振り返ってみると、自分の伝えたいことを子どもたちにいかに伝えるか、という視点ばかりに注目していたように思う。絵カードや写真カード等のAAC手段を教師側の“伝えるためのもの”“子どもが理解するための支援手段”として、使ってきたのである。その結果、子どもとの関係は少し深まったものの、子どもは、受け身的な存在になり、「伝えよう」「伝えたい」という気持ちや、その表現手段を十分に身につけることができなかったと思われる。

そこで、障害のある子どもたちが自分の「伝えたい

こと」「訴えたいこと」を表現できるようになるために、AACを子どもからの発信の手段として活用できないかと考えた。発信でもAACを活用することができるようになれば、コミュニケーション本来の双方向でのやり取りが可能になり、子どもたちの周りの大人が子どもの気持ちを理解できるようになるであろう。そうすることで、互いの関係が深まっていき、子どもたちの生活の質(QOL)を向上させることができるのではないかと考え、この主題を設定した。

・研究の目的

AACについての考えからその活用の仕方を学び、理解を深めるとともに、発信の少ない子どもが自ら発信できるようなAACの活用について、実践を通して検証する。また、子どものアセスメントの取り方及びコミュニケーションのとらえ方についても理解を深める。

・研究の方法

1. コミュニケーションについて学ぶ

・文献をもとに、コミュニケーションについて学び、理解を深める。

2. AACについて学ぶ

- ・文献をもとに、AACについて学び、その種類や特徴について整理する。
- ・講習会に参加し、手続きや活用の仕方について学ぶ。
- ・AACを課題として取り入れたり、活用したりしている授業を参観する。
- ・実態から選択可能なAACについて整理する。

3. 心理アセスメントについて学ぶ

- ・文献をもとに、心理アセスメントについてその目的や特徴を学ぶ。
- ・アセスメントの実際について、事例を通して手順等を学ぶ。

4. 事例を通してAACの活用について検証する

- ・発信の少ない子どもが自ら発信できるよう、子どもの実態に応じたAACの活用について、実践授業を通して検証する。

・研究の結果

1. コミュニケーション

コミュニケーションの定義

『話し手は自らの観念（伝えたい事柄）を何らかの記号媒体（通常は言葉）を通して聞き手に伝え、聞き手はその記号媒体（言葉）を通して、話し手の伝えたい観念を把握する。そして、今度は話し手と聞き手が役割を交代して、再びこの流れが展開される。』
（「肢体不自由児のコミュニケーションの指導」より）

コミュニケーションの二つの側面

- ・「伝える」こと、「理解する」ことを主眼にしたコミュニケーション
- ・気持ちの「分かり合い」「通じ合い」を主眼としたコミュニケーション

気持ちの「分かり合い」「通じ合い」を主眼としたコミュニケーションから、「伝える」「理解する」ことを主眼としたコミュニケーションへの発達ラインは、「分かり合い」「通じ合い」が消失してから「伝える」「理解する」が立ち現れるのではなく、「分かり合い」「通じ合い」を基盤に、その上にの形で「伝える」「理解する」コミュニケーションが現れ、次第に完成したものになっていく。

人とのコミュニケーションにおいて「気持ちの分かり合い」「通じ合い」は、欠くことのできないとても重要な部分であり、発達に遅れのある子どもたちとの関わりでは、特に大事にしなければならない。

コミュニケーションの水準

原初的コミュニケーション

大人の『読み取り』『感じ分け』が大事

前言語的コミュニケーションの水準

サイン等の諸記号で、表現する・理解する
言語的コミュニケーションの水準

代替手段で自由な表現とコミュニケーション

2. AAC（拡大・代替コミュニケーション）

AACとは

「AACとは重度の表出障害のある人々の形態障害(impaired)や能力障害(disability)を補償する臨床活動の領域を指す。AACは多面的アプローチであるべきで、個人の全てのコミュニケーション能力を活用する。それには、残存する発声、あるいは会話機能、ジェスチャー、サイン、エイドを使ったコミュニケーションが含まれる。」

A S H A (American Speech-Language-Hearing Association, 1989, 1991)より

基本は、手段に関わらず、その人に残された能力とテクノロジーの力で自分の意志を伝えること

ex. 歩けることより、行きたい場所へ移動できること

ex. しゃべれることよりコミュニケーションできること

QOLを高める・豊かにする

AACの導入

まずサイン言語から始める。

- ・ラポートが成立しやすい
- ・注意・集中の発達を促す
- ・模倣能力を育てる
- ・手軽、伝達の即時性が高い

子どもの発達に応じてその手段を追加・変更する。その過程では、一つの手段にとらわれず、子どもが理解して使える有効な手段をいくつも併用していく。最終的に指導の手段や内容を何に結びつけるのか、方向性を絶えず吟味しながら進める必要がある。

AACを活用することで、子どもの見る力が高まり、友だちの遊びに興味を示す等、対人関係の改善や模倣行動の形成につなげることができる。この注視する力や模倣する力は、口形や音声の模倣等につながる。AACは「ことばの発達を妨げるのでは」と危惧されるが、逆に、ことばの獲得・促進につながる例が多くある。

3. 心理アセスメント

アセスメントの手順

一人一人の子ども障害の状態や発達の様相等を客観的に把握し、個別のニーズに適切に応え、指導目標を選定することをアセスメントという。

アセスメントの手順

多角的な情報収集

得られた情報をもとに、個々の子どものニーズに応じた具体的な「指導目標を設定」する

指導目標を達成するために「指導計画の作成」が行われる

指導計画に基づいて「指導活動」が展開される
指導の効果は、指導目標と照らし合わせ「評価」される。

アセスメントは、前出の ~ の「診断」の面と、
の「評価」の面に分かれる。
の「評価」はまた、次の目標を選定するための「情報収集」を行っていることになり、へと戻る。これらは連続した一連の活動と考えられる。

アセスメントの方法・検査法

知能検査，発達検査，行動観察，作品分析
自作テスト，インタビュー等

日々の行動観察等から得られる情報は、子どもの状態を把握する上で、非常に重要である。しかし、そこから得ることのできない情報もある。一般的な発達段階のどのあたりに位置するのか、どの程度のアンバランスがあるのか、等は分かりにくい。よって、よりまんべんなく諸機能の発達の状況やつまづきを把握し、子どもの教育的ニーズに応じた教育目標の設定や指導計画作成のために、標準化された検査法等による、心理アセスメントを行うことは効果的である。

4. 事例

目的：要求発信のあまり見られない児童を対象に、児童からの発信を引き出すAACの活用について、事例を通して検証する。

対象児：養護学校小学部1年（ダウン症候群，知的障害）

実態：・自分から大人に関わることは少なく，何か欲しい時は直接行動が多い。（行動観察より）
・要求発信が少ない。（行動観察より）
・微細運動が得意でなく，聴覚記録より視覚記録が優位。（心理アセスメント，NCプログラムより）

指導目標：身の回りの事物と写真カードが一致する。
視覚シンボル（写真カード）を用い「欲しい」ものを自分から教師に要求・表出できる。

指導内容：

写真カード等の理解の促進を図る（課題学習）

PECS^{*1}（the picture exchange communication

system）の手法を取り入れ，児童自らが，要求の発信ができるよう，その手続きを身につける。

表1 実践授業の指導内容

段階	期間 (指導日数)	課題学習		PECS	
		内容	目標	フェイズ	目標
初期 (導入)	7/1~7/2 (3日)	マッチング	具体物と具体物のマッチングができる	-	-
期	9/1~9/2 (6日)	指差し	選択する間接的に示す	1	机上のカードを教師に手渡して要求を伝える。
期	9/30~10/18 (4日)	マッチング	写真カードと具体物のマッチングができる	2	カードを教師に手渡して要求を伝える（離れた位置のカード・教師，いつもと異なる相手）
期	10/19~11/8 (5日)			3	複数枚のカードから，したい遊びのカードを選んで教師に渡し要求を伝える。

* 1 PECSとは

『子ども中心に考えた，機能的な観点に立つモデル。大人からのプロンプト(促し)に頼るのではなく，子どもの方から始める重要かつ意味のあるコミュニケーションの手法』

表2 PECSの特徴・利点

カードさえ渡すことができれば，身振りサインに必要な手や指の操作性や，1枚のカードだけを指さす操作性がいらない
カードを渡すので，その人の注意を引きつけてカードを指さす，という複雑な手順がいらない
マニュアルがあるので，経験が少ない支援者でも，比較的取り組みやすい

結果と考察

写真カード等の理解を図る（課題学習）

前期：具体物と具体物のマッチング

- ・課題の理解を図るため，具体物を一緒に箱に入れる。課題に向かうと，一緒に入れることができた。
- ・複数の具体物のマッチングをする。
それぞれの箱の中身を見比べながら，同じものを入れることができた。

後期：写真カードと具体物とのマッチング

- ・コインやビー玉等の具体物を分類する時に，その形状にあった入れ口から入れるようにし，操作性の課題も加える。
具体物を手にし，カードをチラッと見て正しい方の箱に入れようとする。しかし，うまく入れられないと，もう一方の入れやすい箱に入れてしまう。
操作性の課題をやさしくしたり，生活に密着したもの（コップ，スプーン，歯ブラシ等）を使ったりすると，正しくできる回数が増えた。

課題学習での分類・マッチングの課題を通し，カードの理

解とともに、操作性も向上した。(表3 参照)

表3 NC プログラム発達記録チャート

(*下線のあるものは共通項目)

領域	0:6-1:0	1:0-2:0	2:0-3:0	3:0-4:0
1. 視覚操作	下書きがす 入れる	型はめ マッチング	色名 マッチング	色名 マッチング
2. 理解	バイバイ 指さし	要求 マッチング	動詞理解 動詞理解	動詞理解 動詞理解
3. 表出	音声模倣 身振り模倣	要求 マッチング	名詞表出 動詞表出	名詞表出 動詞表出
4. 視覚	下書きがす 1/2の記憶	1/3の記憶 1容量a	1容量a 1容量b	2語文表出 2容量
5. 聴覚	音声模倣	単語模倣 1容量a	1容量b 2語文復唱	2容量
6. 読字	絵への興味 読字	絵の理解 マッチング	読字 マッチング	読字 マッチング
7. 書字	点画 下書きがす	なぐり描き もう1つ	くらくら描き たくきん	くらくら描き たくきん
8. 数	下書きがす	もう1つ	たくきん	たくきん
9. 微細	出す 入れる	つまむ つまむ	つまむ つまむ	つまむ つまむ
10. 粗大	座る 立つ	歩く 歩く	転がす 転がす	とぶ とぶ

発信の手法

期：目の前の写真カードを手渡して要求する

- PECSの手法を身につけるために、好子^{*2}として児童の好きなお菓子や髪留めを使う。(* 2好子 正の強化刺激、選択頻度が高いアイテムのこと)

好きなもののため、児童は直接取ろうと手を伸ばしてくる。

- プロンプターの教師が、後方から手をガイドしてカードを取らせ、手渡すようにプロンプトする。

最初は手を持たれることに抵抗を示したが、2回目以降はプロンプトにも慣れて、プロンプトされながら、カードを取って渡すことができた。

1日の最初は直接行動が出てプロンプトが必要であったが、その日の2回目以降は、プロンプトなしでカードを渡せることが増えてきた。

期：異なる相手に要求する

離れた位置の写真カードを取り、手渡して要求する

- カードを手渡す教師を替える。
相手が替わると、カードが目前にあっても好子に直接手を伸ばそうとする。しかし、プロンプトを受けると、すぐに般化した。
- カードを身体の正面から少しずれた位置に置く。
カードが自分の視界に入らないと、カードを探すより、直接好子を取ろうとする。
- カードをコミュニケーションブック(A4版ファイル)の表紙に貼る。
ブックは大きくて目に入りやすく、その表紙のカードにも気づきやすいので、カードを手渡せる。
- カードの理解の確認をする。
白紙のカードや、全く興味のないもののカードと一緒に好子のカードを提示すると、間違えることなく好子のカー

ドを選ぶ。カードの理解ができていたことが分かった。自分でブックを開き、目的のカードを探して手渡すことができるようになってきた。

期：写真カードを選択して手渡し、要求する

- 要求の発信を広げるため、“トランポリン”や“キャスターカー”等のカードを増やし、一緒に楽しみながら、カードを提示してカードと遊びのマッチングを図る。

目的があってカードを探したというより、カードを見て「これがしたい」という様子だったが、自分からカードを選び、教師に渡して遊びを要求する。

それぞれの要求が叶えられる経験を通して、カードの持つ意味を理解し、徐々に発信が広がってきた。

発信の手だてを身につけることに関しては、指導回数が少なかった割に、早く身についた。これは、児童の好きな物を取り入れたことと、視覚シンボルが実態に合っていて有効だったからと考えられる。また、指さしたり、注意を引いたりの特長な技術を必要とせず、ただ、カードを渡すだけという簡単な手続きであったことも、児童にとって受け入れやすかった理由と思われる。

まとめと今後の課題

まとめ

本研究を通して以下のような結論を得た。

「的確な子どもの実態の把握に基づき、その実態に応じたAACを活用することで、子どもからの発信を広げることができる」

今後の課題

常に、子どもの実態に応じたAACの追加・変更を考えていくこと

子どもは日々成長する。子どもの実態が変わればAACもその実態に応じて変える必要がある。常に、AACの追加・変更を念頭に置き、その時に、一番合ったAACを選択する必要がある。

実体験を通して興味を広げる

いろいろな遊びの実体験を通して、子どもは「おもしろい」「またやってみよう」という興味・関心を持ち、主体的な発信やその広がりが出てくる。このような場面・環境を整えることが必要である。

生活地図を基にしたコミュニケーション手段の連携

子どもからの発信や要求を深めていくために、家庭や子どもが関わるいろいろな施設・地域の人々と共通理解を図り、連携をとる必要がある。